

トポスにおける発達

第 3 回

－ 身体から意味へ －

無 藤 隆

トポス（場所）の最小限の成り立ちを考えたとき、それは我々の体とその動き、そしてその動きに直接に関与する周りの事物を含み込むだろう。今回は、その成り立ちを、意味の発生という観点から考えてみたい。体を動かすこと、その動きに意味の最も基本的なあり方をとらえる。その原型とはどんなものでありうるのか。

体の動きの原型とは、体の動きの持ついくつかの基本、そしてその動きが周りの物と噛み合うあり方の形である。小さい子どもであっても、いや小さい子どもであるからこそ、その原型的な動きそのものがその生き方の中心をなすはずである。言葉とその意味内容を介しての「弁論」的な影響は弱く、自分の体と共に周りの環境に関わることが中心になる時期だからこそ、体の動きから汲み取るものが大きな意味を持つ。保育とは、そのような子どもを相手にする行為なのである。保育にあつては、体の関わりにいかなる意味を汲み取るかが問題である。

体とは、自分が常にそこにあるものである。自我が体のさらに中であって、体とは別なものとして経験されることもあるが、多くの場合には、体は自分と重なって存在している。ときに、自分とは、体と体の関わる対象の双方を共に動くものとして含み込んで感じられる。自分をそして心を体と別物にしてとらえるべきではない。別に思えることもあるが、そうでないときもあり、そうでないときのあり方から「意味」が発生すると見なせるのである。なぜならば、意味とはこの世界に対する了解だからであり、世界への関わりから生まれるものだからである。少なくとも小さい子どもでの問題とは、心と体とがまさに重なりあい、世界との関係を取り結ぶところ、もっと正確に言えば、世界との関係から心と体とが析出されてくるところの過程にこそあるのである。

例えば、一歳半の子どもが道ばたを歩いている。道の端のちょっと高いところを歩いて、うまくバランスを取って歩く。そこから、わずか数センチの段

差ではあるが、腰を屈めて、道に飛び降りる。そこに、もののバランス感覚とか、高いところに対して低いところを対比して、下へと急激に動くといった動きが見られる。同様のことは、幼稚園での保育室で子どもが巧技台を組み立て、そこで「ドンジャン」をしている光景でも見られる。同じようにバランスを取って歩き、飛び降りたりする。年齢が上がった分、段差が増しているだけでなく、台の上を走ったり、物を持ったり、他の子と一緒になったり、片足で立ったり、その上で飛び跳ねたりするのである。同じバランスと言っても、複雑さが増し、周りとの関係も多様になっている。単にその上を歩くために、体重を重心から振れないようにするだけのことではなく、ダイナミックにバランスを取ることにへと向かっていることが見て取れる。

このような動きの広がりと深化は、幼児の行動の到るところで見られる。トポスの問題として見たときには、この動きの意味の解析は二重に場所の問題

として現れる。一つは、身体が一つのトボスだということである。体自体の探索はもちろんその体を対象として興味を持ち、いじったり、調べたりするということもある。だが、それは体全体にとってのごく一部のことに過ぎない。もっと重要なことは、ここで述べている体の動きとそこから得られる感覚にある。体というトボスは、この世界に位置づき、この世界の中で動き回るものであり、その動きから絶えず体としてのまとまりを感じ取るところに成立する。

もう一つの場所の問題は、体というトボスが身近な環境としてのトボスに関わる場所から生まれる。体がどのような動きを周りに対して行うかに応じて、逆に、周りの環境はどのような動きを体に対して可能性として用意するかが決まってくる。身近な環境とは、この観点から言えば、体の動きの豊かな意味を引き出すためのあり方なのである。バランスの様々な可能性を実現しやすい場所の特性とは何

かが問われることになる。庭や保育室や遊具の特性がそこから定められるはずである。

では、その体の動きの原型的意味とは何であるのか。イメージ図式という考えに学びつつ考えたい。



イメージ図式とは何か

動きの原型を考える上で、興味深い示唆を与えてくれるのが、「認知意味論」を提案したジョンソンの議論である（認知意味論とは、アメリカの言語学

者のレイコフと、このジョンソンが提議したものである。ジョンソンは、その著書『心の中の身体』（菅野盾樹・中村雅之訳、紀伊國屋書店）において、心と体と言葉の意味の根底的な同一性を主張して、次のように述べている。言語学のやや面倒な議論に立ち入らざるを得ないが、保育の問題に対しては極めて示唆的であるので、やや立ち入った紹介をしたい。

「身体の運動、対象の操作、そして知覚的相互作用には、繰り返し現れる型が伴うのであって、こうした型がなければ、われわれの経験は混沌とした不可解なものになってしまうだろう。これらのパターンを、私は『イメージ図式』と呼ぶ。なぜなら、それらは主としてイメージの抽象的構造として機能するからだ。それらは、それぞれの部分が関係し合い、統合的全体に組織されたゲシュタルト構造をもっている。……それをもっと抽象的な認知の水準で、意味がその周辺で組織されるような構造へと広げるこ

とができるのである。この比喩的拡張と洗練は、一般に、物理的身体が相互作用を行う領域からいわゆる理性的過程（たとえば、反省することや前提から推論を導くこと）への隠喩的投射という形をとる」（P. 26）。

要するにこうだ。意味の根本は、後で引用するように、バランスを取るとか、入れ物とその出し入れといった動きの図式にある。その動きは具体的イメージそのものではなく、抽象的な図式である。この図式は、比喩的に思考の過程で用いられ、例えば、「物事のバランスを取る」とか、「情報の出入り」といった分析の形を取るようになるのである。その媒介をする働きこそが想像力と呼ばれるものである。

心と身体を厳格に二分し、感性と理性・悟性を二分し、相互に無関係なものとしたり、別々にあるものが後で総合されるとする（西洋の哲学において）伝統的なとらえ方から脱しなければならぬ。

「概念はわれわれの悟性の所産である。それは形式的で、自発的で、規則に支配されている。それに対して、感覚は身体に属し、われわれの感性により与えられ、実質的・受動的で、組み合わせや総合といった能動的な原理をまったく欠いている」(P. 40)というとならえ方ではなく、「身体を心に返すこと」が必要だとジョンソンは主張する。その核にあるのが、イメージ図式であり、それを様々な具体的、また抽象的な事態に適用するのが想像力である。



物理的包含

含み含まれるという関係は、イメージ図式の代表としてよく検討されている。「包含と限界との出会いは、われわれの身体経験に深く浸透した一つの特徴である。自分の身体が三次元の容器(container)

——ある種の事物(食物、水、空気)がここに取り込まれ、別の事物(食物や水の排泄物、空気、血液、など)がここから出てゆく容器——であることを、われわれは身近に知っている。われわれは最初から、環境(われわれを包むもの)のなかで物理的包含をたえず経験する。部屋、衣服、乗り物、そして限界で画された数々の空間を出たり入ったりしている。対象を操作して容器(コップ、箱、缶、袋、など)に入れる。こうした各事例には、反復可能な空間的・時間的組織がある。換言すれば、物理的包含の典型的図式である」(P. 88)。

この包含の経験、つまり内と外の対比の経験から、次の五つの帰結が出てくると言う(P. 89)。

(1) 外からの防護や抵抗。例えば、眼鏡のケース。

(2) 内部に力を制限し限定する。部屋の中にとると、力いっぱい運動することに制限が加えられる。

(3) 包含された対象が位置を相対的に制限される。金魚鉢の中の金魚や、手でつかんだコップ。

(4) 容器が対象を隠したり、逆に観察しやすくする。対象が見えやすくなったり、見えなくなったりする。

(5) 包含の推移性が経験される。私がベッドにいてベッドが部屋の中になれば、私は部屋の中にいる。

このように、繰り返されるパターンが比較的少数の形に集約され、その形はイメージ的であり、しかもその図式が様々な含意を生みだし、推論の方向を定める。このイメージ図式は具体的イメージそのものではない。その多くを集約して抽象化された一般性を持つものである。だから、様々な事態に適用できる。だが、言語化が容易なものでもない。言語で記述できるのはあくまでその一面に過ぎず、身体的

動きに根を下ろしたその本質は、その動きの際の実感にこそあるのである。

このイメージ図式は、われわれがこの世界に関わり、この世界に位置づくこと、つまり理解ということとを構成する基となるのである。もう一つ大事なことは、具体的な言葉として、その理解がいわば結晶化されることである（だから、言語学者が注目するのである）。実際、ジョンソンの分析に従えば、内(in)と外(out)の意味にはすべて、物理的存在者や出来事ないし抽象的存在者や出来事の間に関係を打ち立てる活動が必要とする。例えば、深い眠りから(out)覚め、寝具の中から(out)出て、ローブを(into)急いで着て、手足を伸ばし(out)、ぼうっとしたまま(in a daze)、鏡を覗き込む(in)。はつきりと目が覚めると、新聞に(in)読みふけり、会話に(in)加わる。……

大事なことは、「外への方向づけの感覚(意義)は、われわれ自身の身体的方向づけの経験にごく密

接に結びついている」(P. 108) ということだ。「内—
外」の方向づけの感覚を、われわれの多数の身体運
動、操作、経験を通じて発達せしめているように思
える」のである。「たとえば、練り歯磨きを絞り出
すことには、内—外」の方向づけをチューブとその内
容物に投射することが伴う。ここには、私の身体と
のかかわりで対象を方向付けている原型との類比が
ある。……すなわち、内—外」の図式ははじめにわれ
われの身体経験、つまりわれわれの知覚と運動の中
に創発するのである」(P. 108)。体の動きで経験され
る原型的図式から発して、それが他の物理的社会的、さらには精神的動きに当てはめられ、世界との
関わりを豊かにまた理解可能なものとしていくので
ある。

バランスを取るといったことにも同様のことが言
える。バランスとはまさに自らの体を使って学ぶ活
動だからである。そのバランスは、例えば、「バラ
ンスを失っている」と感じるといった、心理的な苦

痛の経験にも適用されていく。両手に等しい荷物を
持っているといったバランスの図式は、理論の公平
さといったところに広げられるだろう。

新たな客観性へ

イメージ図式といった考えは行為者のまさに動作
し、活動するときの実感に基づいたものである。そ
の意味で極めて主観的なものだ。しかし、その分析
が他者に了解され、吟味されるという意味での客観
性もまた備えている。誰もが経験することだからで
あり、体の動きや言葉の意味として分析可能だから
である。

トポスという観点から保育を分析するという本稿
での主題から言っても、重要な考え方とそしてまた
分析の方法を提供してくれるものだと考える。

(お茶の水女子大学)